

夫であるフェリクスがわたしの別宅を訪ねてきたのは午後の昼下がりであった。それをメイドから告げられたとき、わたしは困り果てた。部屋で研究に没頭していたわたしは、とても人前に出られる恰好をしていなかったからだ。

作業用の少しくたびれたドレスの袖を縛り、いろんな薬草の汁が染みついた白衣を羽織っていた。長くて重い黒髪も簡単に後ろで結っただけ。

なによりわたしの右手に携えた試験管は、なかの液体がぶくぶくと粟立っている。これを放って書斎の外へ出るなんてできない。

「……また日を改めてもらったり、なんてできないわよね」

わたしは上目遣いでメイドにそう問いかけると、実家からついてきてくれた気心の知れた古株の彼女は、はあとため息を吐く。

「奥様、残念ながら実験は失敗です」

「え、あつ」

もくもくと黒煙を上げる薬品に茫然としていると、彼女は動揺することなくこれで旦那様と会えますねと告げた。

手際よく長い髪を編み込んでアップされて、首元までレースで覆ったドレスに真珠の首飾りをつけられる。これだけ着こめば外見だけはそこらにいる貴族令嬢と変わらない。

「ああクロエ、待ってたんだぞ」

生真面目そうな顔をわずかに綻ばせる、体格の良い赤髪の青年にわたしはへらりと微笑む。腰に下げた剣からカチャリと音が鳴った。絵画から抜け出てきたような精悍な青年は、信じられないことにわたしの夫なのだ。

「えとフェリクス、なにか用なの……」

「オレとキミは夫婦だろう。よそよそしい振舞いはよせ」

一歩距離を詰められると、わたしより頭二つ分ほど大きい彼の影が被さる。生来気が弱いわたしは「ひゃあ」と情けない声をあげてそのまま後ずさってしまった。

「すまん、怖がらせてしまったな」

フェリクスは何も悪くないのに、きまりわるそうに頭を掻いた。

「い、いえ、わたしがいけないの……。そ、それで、今日はどうしたの？」

目を合わさずにそう問いかければ、フェリクスは仏頂面に戻って使用人を呼んだ。

「ああ、今日はプレゼントを持ってきたんだ」

使用人がうやうやしく慎重に、テーブルにトランクケースを置く。それを慎重にゆっくりと開ければ二体の人形が出てきた。

「……これは？」

「オレとキミをモデルに作らせた人形だ。どうだ、よく似ているだろうか？」

陶器の肌はなめらかに輝いて、瞳に宝石が埋め込まれた人形は贅の限りを尽くされており、値段を考えただけで途方もない気分になる。こんな高価なものを貰うほどの価値が自分にあるとは思えなくて、わたしは視線を落ち着きなく漂わせた。

「え、ええ、とっても、きれい……」

かろうじて返事をかえせばすつと、頬に影が近づいていく。びくつとカラダを震わせるわたしに構わずフェリクスが頬を撫でた。

「あ……」

かあつと触れた頬から顔全体が熱くなる。手袋越しに触れられているだけに、呼吸が浅くなつて瞳が潤む。

「そんなに緊張するな。ほら、ちゃんと見ろ」

促されて一対のドールを眺めれば、赤い髪をして煌びやかな騎士服に身を包んだ男の人形と、それに似つかわしくない地味な色彩の人形。白磁の肌と、丸くかわいらしいどんぐり眼、実物よりずいぶんと美人になっているけれど、それでもどこか陰気に見えてしまうのは気のせいだろうか。

「キミは仕事の都合上別邸で過ごすことも多いだろう。だからこれを飾ってくれないか？ オレにキミを見守らせてほしいんだ」

フェリクスは真面目な顔のまま、齒が浮きそうな文句を告げる。素敵な人形だけれど、わたしは夫の提案通りにするのは気が進まなかった。これを飾るとフェリクスにふさわしくない自分を自覚して惨めになりそうだから飾りたくない。しかしせっかくの贈り物を無下にできるわけがなかった。

フェリクスとの結婚が決まったのは王立学園を卒業して、宮廷に魔法の研究員として出入りするようになってしばらく経った頃だった。

この国の始祖は大陸に跋扈する魔物を倒した騎士で、その血筋は現代にいたるまで脈々と続いている。そのためか魔法に対する忌避感が強く、他の国と比べると魔法使いの数が極端に少なかった。ただここ五十年ばかり前から周辺諸国の状況がきな臭くなってきた。このままでは他国に後れを取るだろうということ、国を挙げた急務として魔法の研究や人材の育成を行うように政策を転換したのだ。

そこでやっと目の見たのがうちの家だ。もともと祖父は魔法が盛んな国の貴族だったが宮廷での政治に敗れ、親戚を頼ってこの騎士の国へ亡命した。それ以来疎まれながらも貴族社会で細々と生き残ってきたのである。

フェリクスの出身は生粋の騎士の家だから、一族に魔法に明るい人なんていない。今後の家のためを考えて魔法使いの血を入れたかったからわたしを妻にしたのだろう。

「別に、もう結婚しちゃったから逃げるつもりなんてないのにこんなプレゼント送ってくれなかったって」

寝室に飾られたガラスケースを見る。そのまま大切に人形をしまいこもうとしたわたしをメイドが制して、あつという間にケースを手配して飾ってくれたのだ。彼女達はせっかくだからとフェリクスをわたしが管理している別宅にとどまらせ、同じ寝室で過ごすように提案してきた。わたしは慌てて、ベッドが一人用しかないと理由に夫には客間で過ごすようにお願いした。彼はしぶとといった様子ではあったが、納得してくれたようだった。

研究用の簡素な屋敷なので、壁一枚隔てた先には夫がいる。それを想うだけ

でどうも寝つきが悪い。

「……人形までカッコいいんだよなあ。こまるよ」

この国での魔術師に対する偏見は根深く、いまだ解消されていない。前線に出て戦う騎士たちに比べ、どうしても後方に回ることの多い魔導士たちは楽して戦果を挙げているという侮りがある。もう少し世代をさかのぼればわざわざ国民ではなくて、魔法の使える傭兵を雇って戦争していたという。それは紳士たる国民は魔法など卑怯な手をつかわないという名誉のためだ。けれども、実際問題として魔法を使用しなくては戦争には負けてしまう。そのためわざわざ傭兵を雇い無駄な予算をかけていたらしい。魔導士の家系の子どもが王立学院に入るのを許可されたのだって、ここ十年ほどの話だ。

わたしが入学した当初も偏見が激しく、様々ないやがらせを受けていた。内向的な性格のせいもあり、必死に抵抗したがそれは事態の収束をもたらさな



かった。

「でも、一番困ったのはあの時だったなあ」

確かあれは、最初の期末試験の時。会場の教室が変更されていたのにわたしだけ知らされていなかった。当日それを知ったわたしは慌ててその教室へ向かって試験を受けた。なんとか答案を時間内に終わらせたが、その結果が返却されてからがまた大変だった。

わたしは途中で入室したにも関わらず、成績の上位者に食い込んだのだ。当時のわたしは友人らしい友人もおらず勉強ばかりしていたから当然だ。幸い先生方にはわたしを生まれで差別する人はいなかったので、わからないことがあれば彼らに質問できたので勉強するには困らなかったのだ。

成績表の一覧が壁に張り出されたときのなんともいえないやな空気は、いまでも思い出せる。そしてある生徒がぼそりと疑念を口にした瞬間、攻撃は一

齊にわたしに向かった。

「……試験に回答する時間なんてほとんどなかったのに、おかしくない？ 魔術師らしい卑怯な手でも使ったんじゃないの？」

名門の騎士を多く輩出する家柄の女子生徒は声を潜めるふりをしながら、確実に回りのみんなに聞こえるような声量でそう言った。そして彼女、アライダは悪いことに男女一人ずつ選出される級長で女子の代表も務めていたのだ。

「そうよね、アライダのいう通りだわ」

「魔術師だからどうせ卑怯な手を使ったんだろうさ。カンニングとかさ」

同調する声があちらこちらで上がるのに目の前が真っ暗になりながらなんとか言い返す言葉を探していると、雑音を裂くような凜とした音が響いた。

「やめないか！」

わたしを嘲るように取り囲んでいた人々が一斉に後ろを向く。燃えるような

赤い髪、吊り上がった翡翠の瞳。王族の血を引く侯爵家の一員であるフェリクスだった。

事の発端になった女が顔色を変えて猫撫で声になる。

「フェリクス、ちがうのよわたし。ちょっとおかしいなと思っただけで」

「こうやって大勢で一人責めたてるのが卑怯ではないと?」

「だって、クロエさんが卑怯なことをっ」

「女子級長であるにも関わらず、彼女に教室の変更を伝えなかったキミは卑怯じゃないのか?」

弁明を聞く気がないと示せば、女はしおらしくうつむくふりをする。女はまるで自分が被害者のようなふりをして泣きながらその場を走り去った。続いて友人と取り巻きたちが、彼女を追いかける。それを見送った生徒たちは、きまり悪そうにその場から散っていった。

意図せず二人その場に残される形になって、わたしはひとまずお礼を言わなくてはと彼を見上げた。

「あ、フェリクス、さん。ありがとう……」

「フェリクスでいい。同級生だろう」

「あ、うん……、で、でもなんで、助けてくれたの」

「オレも図書館で試験勉強していたんだ。キミが毎日閉館時間まで机にかじりついていたのはしっていた。だからオレは事実を言ったまでだ。礼を言われるようなことはしていない」

それだけ告げて去っていくフェリクスの背中をわたしはいつまでも見つめていた。結局、わたしを陥れようとした女子は級長を降ろされて、わたしはそれ以来細かい嫌がらせは受けたものの、目立ったトラブルに会うこともなく無事に卒業した。

「……あんな素敵なひとと、わたしが結婚したなんていまでも信じられないよ。あれ？」

ベッドの上に、赤い糸のようなものが落ちているのを見つける。触ると少しくちくちした手触りで、髪の毛だとわかる。

「これは、フェリクスなの？」

昼に頬を撫でられた時に、服のどこかにでもついたのを寝室に持ち込んでしまったんだろうか。たった一本の髪の毛なのに、それだけでもいとおしく感じてしまって手のひらで弄ぶ。

そこでふと、家に伝わる秘術を思い出してしまった。

「いや、ダメダメ。それはダメだって……」

ひとりごちても誰も止める人はいない。結局、浮かんだ浅ましい考えを振り払えなかった。

「……私利私欲のために魔法を使うなんて、やっぱりわたしっていやらしい子  
だわ」

わたしはフェリクスをかたどった人形をそっと持ち上げて、呪文を唱える。  
これは家に代々伝わる恋の魔法だ。恋の魔法、なんてかわいらしい名前とは裏  
腹に、その実情はとても淫猥だ。

まず人形など、相手をかたどった依り代を用意する。そして次に相手の一部、  
入手しやすさからいえば髪の毛が鉄板だが、爪のかけらでもなんでもいい。そ  
れを絹糸で結んで呪文を唱えれば、その依り代と相手の生身の感覚が接続され  
る。昼間堂々と人形を愛でて、舞踏会や人と話しているときに突然気持ちよく  
して困惑させるのもいい。しかしそれでは相手に気づかれやすい。術者を特定  
されれば厄介だ。

推奨される使い方はこうだ。毎晩、相手が眠りこけたあとその人形に魔力を

こめながら愛撫すれば、いやらしい夢を毎夜見るようになる。そうやって何度も愛撫するうちに依り代と相手のつながりは深くなり、徐々に快楽で相手を蝕む。そうして一ヵ月も経てば相手は術者の魔力に酔うようになって、身も心も墮とされてしまう。

祖先の魔女が編み出した術式だ。彼女はこれを使って貴族と関係を持ちなり上がったらしいから効果は折り紙付きだろう。

「……これをつかえば、フェリクスもほんとうにわたしのものになるよね？」  
わたしはさっそく人形の服をすっかりと脱がせた。多少デフォルメされているとはいえ引き締まってたくましい肉体はフェリクスそのものだ。

「フェリクス、人形でも引き締まった身体をして素敵……。いったい職人にいくら包んだのかしら」

結婚初夜は、わたしが羞恥のあまりに泣き出したため完遂できていない。そ

れ以来フェリクスはわたしを氣遣ってかベッドを共にしようとはいわなくなつた。臆病なわたしは自分から彼を誘うこともできないまま、結婚後半年が過ぎようとしている。

「直接誘う勇氣もないのに、こんなことしてるなんてわたしってやっぱりくじなしだ……」

指先に魔力を込めながら、髪の毛を絹糸で人形に縛り付ける。ぼうつと人形が臃げに光ったので、下準備は完了だ。

「フェリクス……、すき♡」

震える唇で腹筋にキスする。ちゅっ♡ちゅっ♡となんども唇を押し当ててくると、ひんやりした陶器があたたかく感じる。だんだん興奮してきてしまつて、ちゅぽっ♡とひととき大きく口づけした。

「すごい……人形ってこんなところも再現するの？」



一部分だけわずかに盛り上がった陶器の部分をそつと撫でてみる。いまごろ、家同士の都合で結婚した妻がこんな策略に耽っているとも知らずに、フェリクスは眠りこけているんだろうか。そう考えるとぞくぞくとほの昏い優越感が湧いてくる。男性器をかたどったそこに舌を這わせる。実際の彼の肉杭を受け入れたことなんてないのに、想像するだけで背中が粟立ってしまう。

「ん♡フェリクスすき♡♡こうしたらわたしのものになってくれるよね♡」

卑怯な真似を嫌って声を上げてくれたフェリクスを、正当じゃない手段で自分のモノにしようとしている。呆れられちゃうかな。嫌われちゃうかな。でもこれ以外自分を好きになつてくれる手段が思い浮かばない。

「ふー♡♡ふー♡♡」

獣みたいに荒い息を吐きながらずつとキスしていると、おなかの奥が熱くなつていく。ひそかに手を伸ばそうとしたとき、唐突に足音が響いてきた。慌

ててベッドから身体を起こす間もなく開け放たれた扉の向こうには、息を荒くしたフェリクスが立っていた。

「え、フェリクス、なんで」

「なんで、はこちらのセリフだが？ ……キミ、いたいオレに何をした」

つかつかと歩いてきて、赤い髪を絹糸で巻き付けたビスクドールを見下ろされた。少しでも魔術に造詣があればなんらかの呪いの類だとわかる。フェリクスはもともと騎士の家系だからそこまで魔力は高くないけれど、王立学園で基礎的なことは叩き込まれている。そうすればおのずとこれがなんだかはわかるはずだ。

わたしは到底言い訳できないことを瞬時に悟った。

「これは、今日オレがキミに贈ったものだ。まさか魔術の媒介に使われるなんてな」

「……ごめんなさい」

俯いて素直に謝る。加えて、それがどういう目的のモノかも正直に白状させられた。

いつも以上に目が合わせられないでいると、フェリクスは深くため息を吐いた。もしかして離婚を言い渡されるのではないかとビクビクしていると、彼がわたしの人形を取り出して目の前にずいと近づける。

「いまつかった魔法、オレにも教えてくれ」

「……はえ？」

「かわいい妻の過ちだ。当然許すさ。でも条件がある。キミも同じ術を受けてもらおう」

「え……」

人形と感覚を共有する魔法をフェリクスに教えろということらしい。なにを

する気なのか見上げれば、フェリクスは熱っぽい目でわたしを見下ろす。

「身も心も墮落させる魔法なんだろう？ そんな物騒なものを使う妻にはおしおきだ」

「くっ！ で、でも、わたしが感じてヨがってるところなんて、みたくないでしょう？ きっと見苦しいし」

「見苦しいかどうかはオレが決める。さあ、早く教えろ」

フェリクスは有無をいわず、わたしのビスクドールを手にとってドレスを脱がせはじめる。その手つきがゆっくりと見せつけるようなものだから、思わず顔を赤らめてしまう。

「どうした、恥ずかしいのか？ キミがやっていたことのほうがもっと恥ずかしいだろう」

「そ、それはそうだけど」

「クロエ、キミは少し気の弱いところがあるがとてもまじめな女性だ。だからこそ自分がしようとしたことがどれだけ大変なことかわかるよな」

「……はい」

かつてクラスメイトを詰問していたような口調にわたしはうなだれる。どうやら教えるまで許してもらえなさうだということを悟った。しかたなく魔法のやり方を明かせば、元々聡明なフェリクスはすぐに理解した。

「なるほど、ではキミの髪の毛を貰うぞ」

背中に張り付いていた長い髪を取られて、魔力を込めた絹糸と一糸まとわぬ姿にされた人形に巻き付けられる。まるで玄人の店で好事家がたしなむ緊縛みたいで目のやり場に困る。

「なにを恥ずかしがっているんだ。キミも同じことをしていたんだぞ」

先ほど教えた呪文を唱えれば、人形に巻き付いている絹糸が臙げに光る。そ

れと同時にドクンとお腹の奥が疼いた。

「あ……♡」

「よし、ちゃんと効いているか確かめなくてはな」

フェリクスが優しく人形のなだらかな胸を撫でれば、ぞわりと背中が粟立だった。一瞬にしてカラダが自分の意志では制御できなくなったことがわかる。自分に使われるのは初めてだから、こんなにカラダが熱くなるなんて知らなかった。

すでに解呪されているにしてはフェリクスは熱っぽい瞳をしているが、まだ魔法の影響が残っているのかもしれない。

「どうだクロエ？」

「んっ♡へんなかんじっ♡カラダがっ♡あつくって♡ぞくぞくってする♡」

これは毎晩続けられると精神を蝕まれるはずだ。あらためて自分が何をしで

かしたかわかって反省する。

「フェリクス、ごめんなさい。もうしないから解呪してっ♡んひっ♡」

皮の厚い指がすりすり和白磁の双丘をなぞる。指が先端に移動して、力が入れてない指がやわらかく掠める。

「っっ♡さきっぱはあ♡らめっ♡」

自分には指一本触れられていないのに、寝間着のドレスの下で乳首がぷっくりしちゃう♡いつもはつつましやかなそこが、ぷくっ顔を出してるのがわかる。

「ほう、すごい効き目だな。たしかにこれは禁術級だ」

抑揚の少ない声で感心したように呟くフェリクスは指の動きを休めることはしない。人形をいじりまわされて、乳首がますます膨らんで、固くなっていく。

「っっ♡ふっ♡もうっ♡やめてっ♡あやまるか、らあ♡」

「謝る？ キミはもう謝罪したじゃないか」

「だって、おこってるんでしょっ♡」

じんじんと布の下で疼く乳首から伝わる痺れに、じわっと下着が濡れていくのを感じる。ふうふうと熱っぽい息を整えながら懇願すれば、フェリクスの喉が上下に動く。まるで欲情して生唾を飲み込んだように見えるが、おそらく気のせいだろう。学生時代、断るのに苦労するくらいモテていたフェリクスがわたしなんかにはムラムラなんてするはずない。

「この術は危険だな……」

しみじみと呟くフェリクスに頭の中で疑問符を浮かべながら同調する。魔力を含めた絹糸を使用すれば術の難易度は決して高くない。その証拠に魔術が得手というわけではないフェリクスがわたしの人形にこの術をかけられるのだ。その手軽さに比べて、効果はすさまじい。



カラダの奥から追いついてられるような焦燥感があつて、いやらしいことをしたくてたまらなくなる。フェリクスにキスされたい♡抱いてもらいたい♡って長年抱いていた願望が抑え切れなくなりそう♡

「っ♡これっ♡すごいっ♡むずむずしてっ♡フェリクスのことっ♡ほしくって♡たまらなくなるっ♡はは♡こんなものつかっちゃったら♡ひとのきもちまでかんたんにかわりそうっ♡」

フェリクスの顔がなにか言いたげに歪む。お互いの家に都合がいいから結婚したのに、本気で好きになられたら困るとでもいいたいのかもしれない。

「っ……、だいじょうぶっ、だから。もうこの術つかわないからっ♡だから、はやくこれ解呪してっ♡んおっ♡」

白磁の肌をフェリクスの熱い舌が舐めれば、乳首のあたりに妙な感触が走る。指一本触れられていないのに、乳首がジンジンしてたまらない♡ぺとぺと、と

何度も熱い舌を押し付けられたら、ぴくん♡と太ももが震える。

「にゃ、にゃんでっ♡」

「どうした、キミがオレにしていたことだろう？　気持ちいいか？　何度イカ

せてやればこの術は成功するんだ？」

「いつ、イカせてやればって……」

あけすけなものの言いにもドキドキする。ひくっ♡とおマンコがわななく感覚を感じながら目を反らせばフェリクスは胸の部分を口腔におさめてしまった。

「ひゃうっ♡」

フェリクスはためらいもなくおっぱいごとぢゅうう♡と吸う。濡れていないのに、じわじわと唾液が染みこむ感覚がつたわって、吸われておっぱいが伸びる。いっしょに乳輪のかたちを確かめるように舌を這わされて、腰が思わず揺らめいてしまう♡

「~~~~♡はっ♡はあっ♡きもちいっ♡これっ♡らめっ♡」

思わず甘い声を出してしまつて、慌てて唇を噛みしめる。フェリクスからしてみたら魔術で無理やり自分を籠絡しようとしていた、愛してもいい女が絶頂しても困るだけだろう。

「っ♡ふっ♡うづ~~~~っ♡」

「んぢゅっ♡どうした、声をきかせてはくれないのか。こんなときまで我慢強くなくともいいんだが、そちらがその気ながらオレにも考えがあるぞ」

熱が籠るカラダを持て余しながら視線だけ上に向ける。考えがあるって、いたい何をするつもりなんだろう。フェリクスは唾液にまみれた胸を指で撫でまわしながら舌を下へと滑らせていく。

「なっ♡それはっ♡だめっ♡」

「ふ、何をされるかわかったのか。クロエは存外スケベだな？」

フェリクスの肉厚な舌が恥骨のあたりをペロペロと舐める。たったそれなのに、乳首を可愛がられながらおマンコに近い場所を舐められると、ぞくぞくして肉土手がひくひく♡とわなないてしまう。

「やっ♡めてっ♡あなたの前でイキたくないっ♡」

片想いをこじらせてた人に、人形とはいえわたしの恥部を舐めさせるなんて申し訳なくて勝手に瞳が潤んでしまう。ぷくっ♡と勝手に期待して膨らんでいく肉土手を自覚しながら、イヤイヤと首を振る。

「キミはオレのことを籠絡しようとしていたくせに、オレにはイキ顔すら見せたくない?」

フェリクスの低い声が、さらに地を這うように低くなる。なにがフェリクスの逆鱗に触れたのかわからずに、わたしはびくりと肩を震わせる。

「キミはオレを支配したがっていたのに、オレに支配されるのはイヤなのか。」

それはひどいんじゃないか。」

「そ、それは……」

「どうしてこんな魔法をオレに使った。オレたちは初夜さえ完遂してないじゃないか。オレと共寝するのはいやなのに、魔術に頼るのはいいのか？　なあ、クロエ。どうしてオレにこんな真似をした。教えてくれ。夫婦だろう。」

「……いえないよ、そんなの」

フェリクスの方が大好きなくせに、気持ちを告白するのが怖くて魔術に頼ったなんて。

「そうか、結局キミはオレを信頼してはいないんだな。……許す心づもりだったが気が変わった。クロエは悪い子だ。悪い子にはおしおきが必要だろう？」

フェリクスは人形の太ももの内側にためらいなく舌を這わせる。湿ったなまあたたかい感触が、ひくひくとわななくメス穴に近づいていく。

「や、やらっ♡やめてえ♡」

「やめて、といわれてもな。これはおしおきだ。なにもオレに話してはくれないキミへのな。許すか許さないかはオレが決める」

しつとりと濡れそぼったおマンコの表面に、なまあたたかい柔らかいものがべったりと張り付く感触がある。人形の秘裂部分をすっぱりとフェリクスの舌が覆っておマンコに自分のものじゃない体温を感じる。フェリクスがゆつくりと人形の秘裂を舐め上げれば、おマンコに舌のざらつきが伝わる。クリトリスの表面を舌でこそがれて、ビクビク♡と腰が跳ねあがった。

「や♡やだっ♡おマンコっ♡なめないでっ♡ゆるしてっ♡」

「——っ♡なんだっ♡キミそんな顔ができるのか。これはますますやめられないな」

フェリクスが秘裂に添えていた舌を今度はゆつくりと左右に動かし始める。

そんなにゆっくり舐められると秘豆が引っかかって押されて♡脳天に甘い痺れがくるっ♡

「っ♡おっ♡おマンコっ♡きもちいつ♡これっ♡らめえ♡」

ついヘコヘコ♡と腰を前後に揺らしてしまう♡無様な姿を見られたくないはずなのに、腰を振るのやめられない♡フェリクスの燃えるような瞳がうっすらと瞳孔を広げたように見えて、どばっ♡と愛液が湧き出てくる♡

ヘコヘコ♡と腰を揺らめかせるわたしにフェリクスが手を伸ばす。突然のことに後ずさることもできなかったわたしのドレスの裾を、フェリクスがまくりあげた。

「っ♡やっ♡なんでめくるのっ♡」

「いやらしいメスの匂いがしたものでな。なるほどここから湧き上がってきていたのか」

いやらしいシミがべつとりとしみ込んだそこを凝視されて、半泣きで足を揃えようとすると「閉じるな」と制される。

「っ♡ひどいっ……」

「オレに許してほしいなら、ちゃんと足を広げてそのメス汁まみれのショーツをよく見せるんだな」

「っっ♡」

夫の来訪を知ったメイドによって、下着は絹の薄い生地のものを用意された。この下着は向こう側が透ける生地で、恐ろしく薄い。こんなものが一枚隔たっているだけだからほとんど丸出しとかわらない。

「初夜で緊張して泣いていた初心なキミとは思えない。ぐっしりだな」

ぷっくりもりあがっているおマンコの肉土手も、ひくつく穴の動きも見られてるっ♡



「うっ♡」

いたたまれなくてドレスのすそを戻そうとすると、優しく手を取られる。

「だめだ。ちゃんとドレスをはだけさせたまま、太ももを自分で広げていろ。

そのいやらしいメス穴をオレに見せろ」

「わ、わかった……」

情けなくて鼻を啜りながら、太ももを蛙のように広げて見せつける。夫は満足したのか、また白磁の肌を舐めはじめた。こんどは舌を前後に動かして擦るだけの単純な動き。それでも愛液が滴ったメス穴と、ぷっくりと膨らんだクリトリスが押しつぶされて頭がおかしくなるくらい気持ちいい♡舐められるたびにビクビク♡ってなってるおマンコも、いやらしく勃起したクリトリスの形も全部見られてるんだと思ったら、泣きたくなる。泣きたくなるのに、おなかの奥がきゅんきゅん疼いて、もうなにがなんだかわからない。正常な思考も、魔

法のせいでできなくなっているのかな。

「ほら、ちゃんと気持ちいいか？ キミのおマンコがどうなってるのかちゃんとオレに教えてくれ」

さっきまで怒っていたのに、突然優しい声で尋ねてくる。その声だけでイキそうになりながら、わたしは素直にこくこくと頷いた。

「あ♡フェリクスにおマンコなめられるのすき♡きもちいいの♡♡やらしい愛液♡ショーツに張り付いて♡おマンコ蒸れ蒸れであちゅい♡♡」

恥ずかしい言葉を口にしながら媚びるように腰をくねらせれば、フェリクスがぢゅう♡♡と秘裂に吸い付く。クリトリスを口腔の柔らかい肉にぴったりと吸い付かれたまま吸い上げられているような刺激に、脳内でパチパチ♡♡と火花が散る。突然の強い刺激に足を閉じることもできずビクビクと腰が浮き上がっていく。

「あ？！ それっ♡らめっ♡おほおっ？！」

濁った情けない声など耳障りだろうに、フェリクスはさらに強く白磁に吸い付いた。吸い付きながら頭を揺さぶられると、勃起クリにブルブル♡って振動が伝わっちゃ♡お腹の奥から尿意に似た感覚が湧き上がってくる♡はずかしい♡でもだしちゃいたい♡なさけないところ♡はずかしいところ♡全部フェリクスに見られたい♡

魔術で惚けた頭では正常な判断などできるはずもなく、まるでおマンコ見せつけるように腰をぐぐっ♡と持ち上げる♡

フェリクスが切れ長の目をわずかに見開いて、わたしのおマンコを凝視する



「あ♡イクっ♡イクのお♡おにんぎょうさんっ♡いじめられておマンコきもちよくなってるのお♡情けなくアクメしちゃうっ♡指一本触られてないのにつ♡

メス汁だらだらたれにやがしてっ♡イクイクっ♡ってしゆるのっ♡お?!

ぢゆるるるっ♡と唾液と一緒に唇を震わせながら激しくおマンコを吸い上げられる。パンパンに腫れあがった肉豆がこんな刺激耐えられるわけない♡

「あ♡イグッ♡イッちやうう♡」

だらしなく広げている内腿の筋肉がふるふる震えて、尿道に液体がせり上がってくる。いやいやと顔を振ったところで、そのこみ上げてくるものを止められはしない。

「クロエは敏感なんだな。いいぞイってしまえ」

ぢゅううゝゝっ♡ぢゅっ♡ぢゅぞぞっ♡と下品な音が響くと、まるでフェリクスの口蓋にお豆さんが押しつぶされているような圧迫感を感じる♡これっ♡ダメっ♡耐えられないっ♡

「おっ♡クリつぶしちややあ♡お潮っ♡おしおでちやうう♡」

ぷしっ♡ぷしやああ♡

こらえられなかった潮が勢いよく噴き出す。ショーツから染み出してちよろりと情けなく弧を描いていく。まるでお漏らししたみたいな屈辱的な絶頂を見せつけながら、おマンコがきゅう♡って締まっていく♡こんな無様なところ♡見られてイッてる♡

「あへっ♡ああ♡はずかしいのにつ♡とまんによっ♡うづ♡も、やだあ」

ぐすぐす泣きながらショーツをびしょ濡れにするわたしにフェリクスが生唾を飲む男が聞こえる。部屋着のローブが持ち上がって、ガチガチに勃起してるのがわかる。こんな貧相な女のイキ顔見て興奮しちゃうなんて、男の人は難儀だな。

そんなことを考えながらどうにか必死に呼吸を整える。足の筋肉が妙に突っ

張ったまま、背中を丸めて、必死に呼吸してるから唇も閉じられない。真っ白な頭のまま、フェリクスの顔を見上げていると、人形を慎重に柵に置いてから、ベッドにあがってくる。

「……いいか？」

フェリクスにやさしく尋ねられて、いきり立ったものの処理をしたいんだなと悟る。

「ん」

いきり立った肉竿をそのままぶち込まれる妄想をして、ぞくぞくとしていると整った顔がゆっくりと近づいてくる。

「え、フェリクス？ な、なんで」

思わず顔を背けると、吊り上がった眉がわずかに下がる

「どうした、妻にキスしてはおかしいのか」

まるで想いあつて結婚した夫婦のような会話にむず痒くなつて、視線を逸らす。

「キ、キスよりもこのまままぐわつたほうが早く魔術のききめがあるわよ？ まぐわつたほうがより術者の魔力を対象に注ぎ込めるし……。わ、わたしが変なことしないようにするなら早くそのいきり立ったものを挿入れてくれれば」  
「キミはどうやら本当にオレがどうして気分を害しているかわからないらしいな」

「え、どういふ……ん♡ふう♡」

口の隙間から舌をねじ込まれて、つう♡と齒列を舐められる。どうすればいいかわからないままに固まっていると、キスがどんどん深くなる。

「ふあ♡フェリクス♡ちよつと……」

舌が奥へ入ってきて、わたしの縮こまっているそれを誘い出す。頭の後ろを

抑えられて、逃げ場をなくされて舌を擦り合わせられて、肩がびくつと震える。

「力を抜け」

キスの合間に囁かれて、困惑しながら意識的に力を抜くと頭を撫でられる。

子どものように甘やかされているのが恥ずかしいのに、にやるにやると這いずる舌が気持ちいい♡

「ふあっ♡」

ぢゅつと舌を吸われて唾液が染み出る。それを舐めとるように口腔の肉に柔らかい舌が這いずり回って、マーキングされてるみたい♡

「ぷはっ♡」

ようやく解放されるとお互いの舌から銀の糸が伝っているのが見えた。それだけで顔が真っ赤になってしまう。

「っっ♡はずかしいわっ♡こんなことしなくてセックスできるじゃない



……！」

「……オレにキスされるのはイヤか」

まるで本当にうなだれているように見えるフェリクスに困惑しながら、わたしは必死に言葉を搾り出す。

「べつに、そんなことはないけれど、ただ必要を感じないだけで……」

「……そうか、イヤではないならオレの好きにさせてもらう」

フェリクスの言葉の真意を問いたですまえに、ふたたび柔らかいものが唇に押し付けられる。またキスされると悟って目を閉じれば、双丘の膨らみを骨ばった手が撫でていく。

「あ♡フェリクス」

「人形に胸、キスされて気持ちよさそうだったろう。ちゃんと直接触ってやるからな」

重力に従って少し横に流れた胸を両手で寄せられて、やさしく指を食い込まれる。そのままぷくりと膨らんだ乳首を指ですりすりと撫でられれば、ぞくりと背中が粟立つ。

「もっ♡あんまりおっぱい弄らないでっ♡なでなでするのっ♡やらっ♡」

「そうか、撫でられるのはいやか。じゃあこうか？」

ツンと尖った乳首の根元を、太い指先がくすぐる。カラダの奥から快感を引き出していくようなもどかしい刺激に思わず腰が揺らめいた。こしょこしょ♡でされると、じれったくておっぱい押し付けたくなるっ♡

「ちがっ♡はやく挿入してくれればそれでいいのに♡おしおきするなら、こんなご奉仕いらないっ♡はやく種付けしてわからせてくれればいいのっ♡」

「ゝゝっ、種付けのおねだりとは、いやらしい妻だなキミは。あまり煽るようなことをいうな。ねだらなくてもあとで抱いてやる」

訓練で焼けた頬を赤らめながら、わたしの乳首の根元から先端までをやさしく抜いていく。皮の厚くなった指で何度も尖った乳首を抜かれると、頭に駆け抜けるような快感が走る。

「んんっ♡フェリクス、これっ♡らめっ♡」

「ふ、そうかキミは乳首をシコシコされるのが好きなのか。顔が蕩けている。かわいいな」

慈しむように笑われながら、またキスされる。お互いの舌を擦り合わせながらしつこく乳首抜かれる。ぢゅぱぢゅぱっ♡っていういやらしい音が脳内で響き渡ってるのに、乳首を触られるたびにビリビリ♡ってあまい痺れが頭を麻痺させてどうにかなくなっちゃいそう♡

「ん♡ふうっ♡んんっ……?!♡」

キスしながらうっすらと目を開ければフェリクスの翡翠のような深い緑色の

瞳とかち合う。いつもの凜とした瞳じゃない。うつすら潤んで、幸せそうで、まるで本当に好きな相手とキスしてるみたい。

おずおずと腕に手を添えれば乳首を弄っていない方の手で優しく背中を撫でてくれる。ふにやりと力が抜けて、気持ちいいのに逆らえなくなる♡

「ん♡ふっ♡うう♡」

きゅっ♡と乳首を摘ままれたまま優しく糸をこよるように乳首をすりつぶされて、びくっ♡と腰が跳ねる。乳首気持ちよすぎて、このままじゃキスされながら至近距離でイキ顔見られちゃう♡

「~~~~っ♡」

酸欠気味でぼうっとした頭でぺちぺち♡とフェリクスの腕を軽く叩く。そうすると、今度は両手で乳首を愛撫し始めた。

「~~~~っ?!」

ちがう、と言葉に出したいのに、舌を吸われていては言葉にならない。きゅうくくっ♡と乳首をつままれて、ビクビク♡と腰が跳ねる♡

このままだと、本当に乳首だけでイっちゃう♡ふーっふーっ♡と必死でキスの合間に荒く息を吸えば、ぐい♡と乳首を軽く引っ張られた。目を見開いてフェリクスを見ると、わずかに目を細めている。

ひどい、わたしが乳首だけでイキそうなのわかってるのに♡乳首ばかりいじめてるんだ♡厚い胸板を押し返そうとしても、身体はびくともしない。赤く腫れぼったい乳首をぐい♡ぐい♡と引っ張られて、パチパチ♡と脳裏で光が爆ぜる。

ガクガク♡と震えるカラダを隠せない♡あともう少し強く引っ張られたら絶対イっちゃう♡

「くくっ♡」

胸を張って、まるでおっぱい弄りを媚びるように左右に振る。発情期の動物みたいに露骨な、いやらしい求愛ダンス。はずかしいのにおっぱいで媚びるのやめられない♡親指と人差し指がぎゅむ♡と乳首を押しつぶして形を変える。そのまま乳首を指でこすり合わせられながら、ぎゅ♡と引っ張られて、脳天で点滅してた光が、絶え間なく弾けて脳内を白く覆った。